

て、「政治的要素がタイの経済発展にたいし最も重要な役割を演ずることが記憶されるべきである。賢明な政策立案があるかぎり、タイ経済の前途は明るいであろう」と指摘していることに、わたくしは強く同意する。第2章では1881年から大東亜戦争勃発までの金融・銀行の発展を述べる。第3章は日本の実質的な占領下における銀行制度であり、軍事占領と金融との関係は興味深い。第4章は戦後の金融と銀行制度の発展であって、とくにインフレをできるだけくいとめ、通貨の安定をもたらしたタイ国政府の努力は高く評価されよう。つづいて現状分析となり、第5章はタイ国立銀行と現在の諸商業銀行の説明、第6章は商業銀行の支店組織についての説明、さらに第7章は商業銀行法の解説、最後に第8章は近代的な商業銀行のありかたを述べる。末尾にタイ国商業銀行についての統計と、タイ経済にかんする文献がおさめられている。

専門外のわたくしが本書を紹介したひとつのゆえんは、ともすれば現地出版のものは、わが国に紹介されていない傾向があることを考えたためである。しかし、これだけの、まとまったタイの金融・銀行についての研究が、タイ人の手により、しかもこれだけきれいにタイで印刷出版されていることで、ぜひ紹介したいという強い気持があるためでもある。

だが、1964年6月30日という最も新しい貸借対照表を見るに、タイの商業銀行（タイで設立16行、外国本店のもの13行、計29行）の、資産総合計が15,811百万パーツ（765百万ドル）にすぎず、また最大の資産をもつバンコク銀行のそれが3,502百万パーツ（170百万ドル）にすぎないのである。いかにこの国においてさえ、商業銀行の発達がおくれているかが明らかである。（木岡 武）

Michael Brecher: *The New States of Asia, A Political Analysis*. Oxford Univ. Press, 1963.

とくにアジアの新興国家の場合には、その政治の理解は国内政治と国際政治を総合したアプローチを取ることが必要である。それらの国家は、それ自身の力は弱く、それを取り囲む環境の圧力はたかいからである。ネールの秀れた伝記の著者 Michael Brecher のこの著書は、そのアプローチを試みたものとして、アジアの新興国の政治を理解する良い手引であると言う

ことができる。

彼は第1章において、植民地主義からこれらの国家が独立する過程を歴史的に描写したあとで、第2章では現在の政治の不安定を研究する。貧困、積年の政府への不信、政治的エリート間の分裂に加えて、これらの国が独立の時に採用した立憲民主体制は、いささか非現実的であった。国民には民主主義の経験はなく、社会は数年前の戦争と革命の動乱の後で混乱しており、しかも政治秩序を保つために必要な人力、とくに訓練された官僚が不足している。さらに、ビルマやセイロンなど多くの国家はかなり強力な少数民族を統合することに成功していないために、国内はさらに安定を欠いてしまう。そして何よりも、政治的決定に時間がかかる民主主義は、急速な工業化を望むこれらの国の指導者の気持と合致しないものである。こうした理由から1958年ごろから、西欧民主主義への批判が公然となされ、軍部が抬頭し始めたのであった。しかし、その政治は依然として安定をみていない。

しかも、これらの国家は新らしく得た地位を守ることにのみ熱心で、必要とされる国家間の協力はきわめて僅かである。著者は第3章において、東南アジアの国際関係を世界政治における「従属的システム」(Subordinate state system) と考え、その特徴を、(1) その国力の弱さ、(2) 地域を統合する機関の不足、(3) その構成メンバー間の統合の欠如をあげ(それはコミュニケーションと輸送の不足と関係する)、その結果としてシステムが「支配的システム」によって浸透されていると言う。第6章もまた同じような問題をやや詳しく、そしていささか描写的に扱っているが、そこでも著者は東南アジアが他の領域からの圧力に押される「低気圧地帯」だというコラ・デュ・ボアの意見に賛成し、東南アジアは第1次世界大戦前のバルカンに似ていると言う。その貧困さを考えると、「東南アジアは未来の世界のアキレス腱である」という著者の言葉は、傾聴に値する警告であると言えよう。（高坂正幾）

Hanks, Jr. L. M.: *Merit and Power in the Thai Social Order*, American Anthropologist, vol. 64 (1962), No. 6, 1247-1261.

センター関係の方々が接触されることの多いタイ国人についてのべた論文にめぐり合ったので紹介しよ